

02 歴史展示の具体的内容
歴史ストーリー

テーマストーリー
＜東アジア文化の受容と変容＞

語り部 南淵請安

<東アジア文化の受容と変容> 概要

古来、日本は中国大陸や朝鮮半島の先進文化を熱心に取り入れてきましたが、飛鳥時代には、より一層積極的な東アジア文化の受容が行われました。大陸の先進技術や、陰陽五行説などの古代中国思想に基づいて、壮麗な寺院や宮殿、祭祀のための施設などが建築されました。また万葉仮名を使った万葉集のように、受容した文化を変容させた日本独自の文化も生み出しました。このような東アジア文化の受容と変容の歴史を紹介します。

【1】4、5世紀の日本

大陸の先進技術が、朝鮮半島からの渡来人によってもたらされました。文筆、財政、鍛冶、製陶、土木、建築など様々な技術を伝えた渡来人たちは、畿内とその周辺に住みついて、文化の発展に大きく貢献しました。



【2】東アジアの中の日本

推古天皇の時代、隋が中国を統一、東アジアは緊張を高めます。国の自立の必要性を感じた聖徳太子は、隋との対等外交を画策して遣隋使を派遣し、先進文化の直輸入を図りました。一方、慧慈や観勒などの朝鮮半島からの渡来僧にも学びました。国家意識の目覚めの中で積極的な文化の受容が展開されました。



【3】陰陽五行と古代の思想

原始的な思想や風習に縛られていた日本人々に、渡来文化が科学的な知識をもたらしました。陰陽五行説に基づく易、暦、医、天文学などは、自然を克服するという考え方を日本人の中に芽生えさせ、飛鳥時代には大掛かりな建築や水路、時計などの構造物が造られました。



【4】大陸の先進技術

遣隋使・遣唐使として留学していた人々と渡来系氏族を中心に、先進技術を用いた新たな国づくりが進められました。祭祀の施設や宮殿、寺院が建築され、それに伴う瓦、貴金属、鍛冶製品などが生産されました。習得した先進技術を用いて日本独自のものも生産され始めました。



【5】漢字と万葉仮名

文字のなかった日本に漢字が伝えられ、律令制度や官僚制度が整えられ始めた飛鳥時代には漢字の教養が必須となりました。しかし、漢字を中国語として受容するのではなく、日本語に漢字をあてはめて表記する万葉仮名に変容させました。万葉仮名はさらに変容が加えられ、カタカナやひらがなを生み出していきました。

語り部：南淵請安（みなぶちのしょうあん）

（生没年不詳）

略歴

7世紀前半の学僧。

飛鳥川上流の稲渚に居住した渡来系の東漢氏（やまとのあやうじ）の一族。608年、高向玄理や僧旻らとともに隋へ留学し、640年に帰国。「日本書紀」によると、中臣鎌足や中大兄皇子が請安に儒教を学び、その行き帰りに蘇我氏打倒の策をこらしたとのエピソードを伝える。大化改新政治に参画した形跡はなく、そのころまでには没していたと推定されている。

南淵請安は32年もの間、中国に留まり、隋・唐の興亡、唐の隆盛を直接見聞きした。請安をはじめとする留学生達がもたらした大陸の情報は、日本人々にとって大いに刺激となり、中大兄皇子や中臣鎌足による政変にも結びついた。

明日香村の稲渚には、請安の墓と伝えられる塚がある。

中心人物／周辺人物

阿知使主

飛鳥に古くから住みついた渡来系氏族・東漢氏の祖とされる。東漢氏は技術者集団を束ね、ヤマト政権に重用された。

聖徳太子

緊迫した国際情勢の中、遣隋使を派遣。大陸の先進文化を積極的に摂取し、自国の文化や生活の中に取り込もうとした。

観勒

推古朝に渡来した百済の僧。経論とともに天文、暦、陰陽道を日本に伝えた。観勒の伝えた暦を聖徳太子が採用。

僧旻

608年遣隋使の一員として中国に渡り、632年帰国。仏教のほか易学を修め、大化改新後は国博士として学んだ知識を活かした。

高向玄理

608年遣隋使の一員として中国に渡り、640年に南淵請安とともに帰国。僧旻と並んで新政府の国博士に任じられ、外交面でも活躍。

齊明天皇

大陸の先進技術を用いて飛鳥に迎賓館や饗宴施設、庭園などを次々に建設。息子の中大兄皇子は時間を管理する漏刻をつくった。

柿本人麻呂

後世の人に歌聖と称えられた飛鳥時代の歌人。漢詩文の影響で五・七調に整えられた長歌・短歌の発達に貢献した。

太安万侶

古事記の編纂者。稗田阿礼が語る内容を筆録し、万葉仮名と漢文を併用するという大胆な手法で日本の歴史を書き記した。

<東アジア文化の受容と変容> ストーリー詳細

南淵請安の語りによる「テーマ：東アジア文化の受容と変容」についての解説

[南淵請安]

私は南淵請安(みなぶちのしょうあん)。

飛鳥時代に留学生として中国に渡り、32年間学んだ後に帰国、中国の文化を日本に伝えた者です。

これからみなさんに、日本が東アジアの進んだ文化を取り入れながら、自分達の国を築いていった様子をお話ししましょう。

第1章 4～5世紀の日本

中国大陆や朝鮮半島から日本への文化の伝来

[南淵請安]

話は飛鳥時代を少し遡った4～5世紀から始まります。

それより以前、東アジア文化圏であった日本へは、中国大陆や朝鮮半島から、稲作や鉄器、青銅器をはじめとしたものが伝来し、文明化の手助けをしてきましたが、この4～5世紀頃にも著しい文化的な発展がありました。

先進技術をもたらした 渡来人と渡来文化

[南淵請安]

その頃、日本は巨大な古墳が次々に造られる古墳時代の真っ只中でした。大きな古墳を造るのには、優れた土木技術が必要です。それに古墳にはたくさんの副葬品も収めなくてはなりません。

土器、鉄器、青銅器、武具や馬具、耳飾や帯などの装飾品。それらを一体、誰が作っていたのでしょうか。

答えは、その当時朝鮮半島から渡ってきて日本に住み着いた数多くの渡来人です。

もちろん、国内で生産できるようになろうと必死に努力はしていましたが、まだまだ未熟だったのです。

渡来人達は畿内とその周辺に住み、文筆、財政、鍛冶、製陶、土木、建築など、様々な分野の仕事を受け持ち、大きく貢献しました。

南淵請安の祖先も渡来人

[南淵請安]

実は私の先祖も、4世紀頃に朝鮮半島の百済という国から、一族を率いてやってきた渡来人です。阿知使主(あちのおみ)という名前で、文章能力に優れた人物でした。その子孫は東漢氏と呼ばれ、文字を使いこなせる人が日本にはまだ少なかったため、ご先祖様はずいぶん重宝がられたようです。

檜隈寺跡(於美阿志神社)



神社はその東漢氏の祖である阿知使主を祀り、また、東漢氏の氏寺・檜隈寺跡でもある。

飛鳥時代の東アジア情勢

〔南淵請安〕

飛鳥時代以前の日本は、大陸から様々な文化や技術が伝わってはいましたが、まだそれらを十分に使いこなせてはいませんでした。

しかし飛鳥時代になると、そのんびりとはしていられない状況が生まれます。

第2章 東アジアの中の日本

隋の中国統一と日本国内での緊張感の高まり

〔南淵請安〕

588年、蘇我馬子は朝鮮半島から技術者を招いて寺の造営に着手し、596年、飛鳥寺がそびえ立ちました。この頃、中国大陆に強大な力を持った国が現れます。隋です。

中国を統一した隋は朝鮮半島にも進出、その勢いに危機感を抱いた日本は、一刻も早く自立しなくてはという焦りに包まれました。

そんな中、日本の自立のために思い切った政策を打ち出した人物がいました。聖徳太子です。太子の打ち出した政策とは朝鮮半島を飛び越して、直接隋と交流することでした。

先進文化を取得するため、遣隋使の派遣を決意 ―聖徳太子の思い―

〔聖徳太子〕

これまで日本は百済・高句麗・新羅など、朝鮮半島の国々を通して大陸のことを学んできました。しかし、その方法では最新の情報が伝わりにくく、隋に肩を並べるだけの力をつけるには不十分なのです。国際情勢が緊迫している今、直接学ぶことが重要だと考え、遣隋使を派遣することを決意しました。

高句麗僧・慧慈の示唆

〔南淵請安〕

太子が直接中国から学ぶという方針を打ち出したのには、太子の学問の師であった高句麗僧・慧慈の示唆するところも大きかったのではないかと思います。

慧慈は595年に高句麗から来日、飛鳥寺に招かれて仏教について講義するとともに、外交のあり方などについても太子に教えたと言われています。

（～続き） 第2章 東アジアの中の日本

隋に派遣された8人の留学生

〔南淵請安〕

607年に太子は遣隋使として小野妹子を派遣しました。翌年、隋は答礼使として裴世清を送り、一行は新しく造られたばかりの小墾田宮で美々しく着飾った人々に迎えられました。そして小野妹子は、裴世清を送って再び隋に赴きました。

この時、聖徳太子は8人の留学生を選び、「隋の優れた文化を学びとって帰るように」と命じられました。この留学生のうちの1人が、何を隠そう、この私だったのです。後に国博士となる高向玄理や僧旻も一緒でした。

南淵請安たち留学生の決意

〔南淵請安〕

8人の留学生は全員が渡来人の子孫でした。初期の頃には重宝がられた技能も、次第に時代遅れなものになっていました。「もう一度勉強し直して、国にとって大切な役割を担いたい」そんな野心が全くないとは、私達の誰も言い切ることができなかったでしょう。

それぞれの思いを胸に秘め、私達は大国隋のすべてを吸収しようというくらいの意欲に燃えて、海を渡ったのです。

第3章 陰陽五行と古代の思想

留学生が学んだ最新の科学知識や思想

〔南淵請安〕

私達が隋で手に入れたいと望んでいたもの、それは人が暮らしていく上でよりどころとなる、規範のようなものでした。たとえば農民にとって、種蒔のタイミングや、台風などの予測はとても重要です。そのため、中国では古くから暦を作成するために天文学が発達しました。飛鳥にも暦は伝えられていましたが、使いこなされてはいませんでした。

天体の動きから未来を予測する「天文学」、自然界の成り立ちを説き明かす「陰陽五行説」、時を支配するための「暦学」などは、いわば古代の科学にあたります。そうした科学的な知識や、人の生きる道を説いた「儒教」「仏教」などの思想を、私達は知りたかったのです。

科学や思想を伝えた朝鮮半島からの渡来人

〔南淵請安〕

もちろん、朝鮮半島からの渡来人を通して、新しい科学知識や思想の積極的な受容は続けられていました。604年には百済僧・観勒(かんろく)が伝えた暦を聖徳太子が採用しています。

暦、天文地理、遁甲、方術を伝えた―百済僧・観勒の思い―

〔観勒〕

私は暦法、天文地理、遁甲、方術などの書籍を日本の朝廷に提供し、何人かの学生にその教を伝授しました。暦法や天文学には算術が関連しているのでとても難しいのですが、生徒達はとても熱心にそれらの知識を体得し、自ら使いこなすことができるようになってくれました。

留学生・南淵請安たちの帰国

〔南淵請安〕

中国に渡ってから10年が過ぎた618年、あの強大だった隋が滅び、唐にとって代わられるという大事件が起こります。幸い、唐は隋の体制を引き継ぎ、私達も勉強を続けることができました。

そして640年、ついに日本に帰る日がやってきました。隋と唐、2つの国で32年にわたって学んだことを役立てる時がやってきたのです。

中大兄皇子や中臣鎌足も南淵請安に学ぶ

〔南淵請安〕

飛鳥川に沿った稻渚の集落に居を構えた私の元に、早速若者達が詰めかけてきました。彼らは乾いた砂が水を吸い込むように、私が教える儒教を始めとした学問を吸収していきました。生徒達の中には、後に乙巳の変によって、古い時代の政治を打倒し新しい政治を目指した中大兄皇子がおり、中臣鎌足とともに学んでおりました。

新知識を若者たちに伝授―僧旻の思い―

〔僧旻〕

南淵請安とともに中国にわたり、632年に帰国した私のもとにも、志を持つ若者たちが集ったものじゃった。その中でも中臣鎌足は非常に優秀な人物じゃった。私は唐で学んだ最先端の知識のひとつである易学の講義をしたのじゃ。大化改新後は国博士として迎えられ、天文の異変や吉兆の出現等を解釈して朝廷にお伝えし、新たな政治のお手伝いをさせてもらったのじゃ。

唐で学んだ知識を政治に生かす―高向玄理の思い―

〔高向玄理〕

私は640年に帰国し、僧旻とともに大化改新後の新政府の国博士を務め、中大兄皇子や中臣鎌足とともに新たな国づくりに参加しました。私は国家体制づくりの知恵袋であると同時に、外交問題が専門分野でした。当時の大陸や朝鮮半島の事情は刻々と変化しており、その情報を細やかに分析しながら我が国の将来のために外国と度重なる折衝を行ったのです。

（～続き） 第3章 陰陽五行と古代の思想

留学生がもたらした新しい国づくり

〔南淵請安〕

私たち留学生がもたらした情報をもとに、645年から始められた大化改新の政治によって、天皇を中心にした国づくりが進められたのです。そして唐風の文化も次々に取り入れられていきました。

キトラ古墳と東アジア文化

〔南淵請安〕

中国の思想である陰陽五行説が、飛鳥の人々の間に浸透していったことを示すものの一つにキトラ古墳があります。7世紀後半に造られたと思われる古墳の内部には、「天文図」「四神図」「十二支像」などが、繊細な筆遣いで描かれています。

壁画に描かれた天体・日月・四神・十二支などは、いずれも陰陽五行説に基づいて正しい方位に置かれています。これは天地の秩序がしっかりと保たれていることを意味しており、その乱れない秩序の中で、死者の魂は安心して天界へと旅立つことができるのです。

キトラ古墳の壁画は、日本にもたらされた陰陽五行説などの古代中国思想が根付いていった証なのです。

キトラ古墳



高松塚古墳と東アジア文化

〔南淵請安〕

また、キトラ古墳より少し後に造られたとみられている高松塚古墳にも、素晴らしい壁画が描かれています。

極彩色に彩られた女子群像と男子群像、合わせて16人が描かれた様子は、葬られた人物の宮廷での日常の世界であり、生前と同様に死後の世界でも亡き主人に仕えるという世界観が表現されていると考えられています。

高松塚古墳



思想・科学を取り込んで成熟させた日本人

〔南淵請安〕

中国から学んだ思想を十分に理解して、見事な壁画で表現してみせた2つの古墳からは、かつて未熟だった日本が見事に成長を遂げ、大陸の思想や文化を、自らの血や肉として取り込んでいったことがうかがわれます。

そしてそれは、やがて日本古来のものと溶け合って、独自の文化を生み出す基盤となっていくます。

第4章 大陸の先進技術

大陸の先進技術と斉明天皇の大規模工事

〔南淵請安〕

遣隋使や遣唐使、そして朝鮮半島からの渡来人達によって、思想や文化とともにもたらされた大陸の先進技術。それは新しい都づくりに活かされました。

655年に皇位についた斉明天皇は、工事好きの天皇として知られています。飛鳥一帯で大規模な土木工事を行いました。

迎賓館や庭園の建設技術

〔南淵請安〕

その一つが、亀形石造物。円形劇場のように石を積み上げ、中央には亀の形をした石造物や小判型の石造物が置かれています。これらは導水構造を伴っており、水を使った儀式の場だったと考えられています。

亀形石造物



異国風の石人像や不思議な雰囲気を漂わせる須弥山石。

どちらも噴水の機能を持っています。これらは外国の使節や遠方の民をもてなす迎賓館の建築に伴って造られ、饗宴の場に飾られたようです。

斉明天皇は庭園も造りました。飛鳥京跡苑池です。庭園も大陸からもたらされたものですが、この庭園には松が植えられ、州浜状に石が敷かれて、日本庭園の原型のような風景が広がっていました。国際色豊かな中にも、日本人の感性と融合した文化が、少しずつ育ち始めていたのです。

飛鳥京跡苑池



大規模建築は国力充実の証 ― 斉明天皇の思い ―

〔斉明天皇〕

工事好きと言われれば、その通りかもしれぬ。しかし、緊迫した東アジア情勢の中で、国家の力を誇示し、支配力を高めるためには、立派な施設は是非とも必要であったのじゃ。饗宴の場に外国使節だけではなく、隼人、蝦夷といった遠方の民を招いたのも、国を一つにまとめるための手だてだったのじゃ。

時間による支配

〔南淵請安〕

660年には日本で初めて時計が作られました。時間を計り、鐘や鼓を撞いて人々に時刻を知らせました。天子は時を支配するという中国の思想に基づいたものです。

(～続き) 第4章 大陸の先進技術

渡来技術の体得と国家的工房の出現

〔南淵請安〕

天武・持統朝になると、さらに多くの宮や寺院などが建てられました。そして、建築材料や、そこで日常的に使うものを生産するための工房もつくられます。飛鳥池工房遺跡がそうです。

飛鳥池工房は、様々な品物を大量に生産するための、国営の総合的な工房で、瓦や須恵器、金・銀・銅などの加工品、ガラス、漆製品などが生産されました。渡来人達の力を借りながらも最先端の技術が国内で根付いていったのです。

貨幣もこの工房で鑄造されました。日本初の貨幣、富本銭です。唐に倣ったしくみや技術がどんどん取り入れられていったのです。

飛鳥池工房遺跡



仏教とともに伝わった技術と、最初の本格的な寺院・飛鳥寺

〔南淵請安〕

大陸の先進技術の粋を集めたものの一つに仏教寺院があります。仏教の伝来とともに寺院建築の技術や仏像を造る技術などが伝えられました。

飛鳥で最初の本格的な寺院が建てられたのは596年のこと。蘇我馬子が創建した飛鳥寺がそうです。

日本ではじめて瓦が用いられ、伝統的な掘立柱建物ではなく、礎石の上に柱を建てる、今までになかった建築物です。

寺院の造営や仏像の造立には鞍作止利(くらつくりのとり)ら、渡来人やその子孫が活躍しました。飛鳥大仏と呼ばれる、丈六の日本最古の鑄造仏も止利仏師の手になるものです。

飛鳥寺



飛鳥の寺院に見られる東アジア文化の影響

〔南淵請安〕

飛鳥四大寺の一つ、川原寺は、五重塔と2つの金堂、大きな僧坊がある絢爛豪華な大寺院でした。唐様式の瓦、朱塗りの柱、礎石を使った堂塔等は、大陸から吸収した技術を用いて、国内の技術者が造り上げたものだと考えられています。寺の一画には、瓦や寺で使う金属製品を手作りの工房があり、高度な技術を持つ人たちが寺の敷地内に詰め、生産から修理まで一貫して行っていました。

また、橘寺には、二面石と呼ばれる異国風の石造物があり、人の善悪二相を表したものとされています。

飛鳥時代から積極的にはじまった東アジア文化の取り込みは、建築や美術工芸をはじめとして広範囲におよび、熱心な学習によって国産できるだけの力を蓄え、やがて独自の文化を創造することへと発展していきます。

二面石(橘寺)



第5章 漢字と万葉仮名

「文字」という東アジア文化の受容

〔南淵請安〕

日本人が大陸から学んだ文化を受け入れて独自のものへと変容させた例として、最も偉大な発明と言えるのが文字ではないでしょうか。

日本人は長い間、文字を持たずに生活していました。

5世紀頃には漢字を使うようになりましたが、十分に使いこなすことができず、渡来系の氏族が「史部(ふひとべ)」と呼ばれる文筆専門の集団として、活躍していました。

高句麗僧・曇徴が伝えた紙と墨

〔南淵請安〕

610年には高句麗の僧・曇徴が、紙と墨の製法を伝えます。曇徴は聖徳太子に招かれ、斑鳩に居住するほど仏教に詳しい人物でした。当時の僧は仏教の教えだけでなく、様々な先進技術を身につけた技術者でもあったのです。

（～続き） 第5章 漢字と万葉仮名

文字を用いる文化の充実と万葉仮名の発明

〔南淵請安〕

大化改新を経て国づくりが本格化すると、役所の機能を支えるものとして文字が不可欠となり、漢字の教養は役人にとって必須となりました。しかし困った問題が起きました。漢文だけでは日本語の言い回しを伝えることができないのです。

そこで考え出されたのが、日本語の発音によく似た音の漢字を持ってきて表記するという方法でした。これが、万葉仮名と呼ばれるものです。この画期的な発明によって、日本人は自らの言葉を文章によって語ることができるようになりました。

万葉仮名と万葉集

〔南淵請安〕

この万葉仮名の発明によって、後世に素晴らしい贈り物が残されました。そう、「万葉集」です。天皇から庶民までが仲良く平等に歌を詠んでいる、世界でも珍しい歌集です。

代表的な歌人の一人に柿本人麻呂がいます。

日本語による心情の表現を得た ― 柿本人麻呂の歌への思い ―

〔柿本人麻呂〕

当時の貴族の教養として、私も漢詩や詩経を習いました。それはそれで素晴らしく、新しい文学表現に目を開かせてはくれましたが、私はやまとことばの美しい調べに乗せて詠う歌も、負けないくらい素晴らしいと思っています。

それで、無名の人であろうと天皇であろうと、良いと思う歌は採集しておりました。その一部が万葉集に載せられているのは嬉しいことです。

万葉歌碑



〈明日香の万葉歌碑〉

甘樫丘の中腹に天智天皇の皇子・志貴皇子の歌碑がある。

「采女の袖吹きかへす 明日香風 都を遠み いたづらに吹く」(1-51)

志貴皇子は万葉を代表する歌人。歌は、飛鳥から藤原京に遷った後の空しさや無常感を、美しく表現している。

日本の言葉で国の歴史を記録した古事記

〔南淵請安〕

文字を手に入れたことによって、日本が正統な歴史を持った国であることを示す、歴史書の編纂も始まりました。記憶力に優れた稗田阿礼が語った内容を、学者の太安万侶が書き留めて、712年に完成したのが「古事記」です。太安万侶は阿礼の語り口を損なわないよう、万葉仮名と漢文の読み下し文を併用するという大胆な手法を用いています。

語りの魅力を活かすために記録する文字を工夫する ―太安万侶の記録と文字への思い―

〔太安万侶〕

わが国には文字がなかった代わりに、語り部という素晴らしい存在がありました。この日本古来の文化がもつ魅力を残したくて、万葉仮名と漢文の読み下し文を併用するという方法をとりました。

とても苦勞しましたが、阿礼の語り口を、何とか残すことができたのではないかと思います。

万葉仮名は仮名文字の発明へとつながってゆく

〔南淵請安〕

飛鳥時代の人々が発明した万葉仮名は、平安時代には仮名という日本独自の文字を生み出しました。大陸から受容した文化が、新しい文化の花を咲かせたのです。文化の受容と変容のプロセスは、日本人らしい方法論として、その後の歴史の中でも繰り返されていきました。

東アジア文化の受容と変容が、日本独自の文化を生み制度を充実させていった

〔南淵請安〕

私達は大昔から先進的な文物にあこがれ、東アジアの文化を吸収し、技術を学び自国でつくることができるよう努力してきました。

飛鳥時代になると、さらに広範囲に、技術だけでなく、思想や文化も学び取ろうとしました。その真剣な学習によって、受容した東アジア文化を日本独自のものに変容させ、あるいは日本の制度や文化を変容させ、新しい文化と融合することによって、私達の独自の文化を育てたのです。

その営みは藤原京へ、そして平城京へと受け継がれていきました。

＜東アジア文化の受容と変容＞ 映像構成案

■映像展開について

飛鳥時代の国際人・南淵請安が語り部となって、東アジアから伝わった文化に彩られていた飛鳥京を案内します。

現代の明日香村の風景と、飛鳥時代を再現した仮想現実の風景の画面が重なり合いながら映像展開し、飛鳥時代の東アジア文化について紹介します。

出発点となるのは万葉文化館。この場所は、古代の国営工房・飛鳥池工房の跡地でもあります。東アジアの技術を象徴する場所から物語がはじまり、続いて明日香に残る遺跡や寺院跡、古墳などを順に巡ります。

請安の語りによる解説に加えて、飛鳥時代に活躍した主要人物も登場し、東アジア文化の受容や変容に関するそれぞれの思いを綴り、当時の人々のいきいきとした姿が感じ取れる映像構成とします。

プロローグ

緑に包まれた現代の明日香の風景が広がる。

「ここはかつて、東アジアの先進文化に彩られた国際的な都でした」

そのナレーションをうけて、現代の明日香が、宮殿や寺院がCGによって再現された古代の飛鳥の姿へと変わり、その画面の中へと引き込まれるように入っていく。

「飛鳥時代の国際人・南淵請安が、東アジア文化を取り入れながら独自の文化を築いていった飛鳥時代の様子をご紹介します」

大陸の先進技術

古代を巡る旅の始まりは万葉文化館から。

万葉文化館の中にある飛鳥池工房遺跡の実写の中から姿を現す南淵請安。

「ここは飛鳥時代最大の国営の工房でした。申し遅れました。私は南淵請安、飛鳥時代の学者で、遣隋使とともに留学した者です。では早速古代の工房にご案内しましょう」そう言うと再び工房の中に消える。それと同時に古代の工房が現れ、大陸の先進技術を使って寺の瓦、金銀銅の加工品、ガラス製品、富本銭などが国産されていたことが、請安の語りとナレーションによって説明される。

同様の方法で、飛鳥水落遺跡などの先進技術を紹介する。

また飛鳥京で大工事を行った斉明天皇が、

「国の力を国内外に示すために大掛かりな施設をつくった」と説明する。

東アジアの中の日本

東アジア地図が現れ、日本が東アジア文化を積極的に取り入れることになった背景が説明される。6世紀の後半、隋が中国大陆を統一し、東アジアは緊張に包まれる。侵略されるかもしれないという恐怖から、日本は一日も早く諸外国に肩を並べる国になる必要に迫られた。

場面は飛鳥時代の小墾田宮に変わり、聖徳太子の姿が映し出される。

聖徳太子はそれまでも朝鮮半島を通して先進文化の導入を図ってきたが、直接隋から学ぼうと考え、遣隋使の派遣を決意する。608年、小野妹子とともに8人の若者が留学生として隋に送られた。全員が渡来人の子弟で、その中の一人が南淵請安だった。

聖徳太子は彼らに語りかける。

「そなた達、どうかわが国の未来のために、中国のすぐれた思想・文化を学んできてほしい。頼んだぞ」

中国に渡った請安は32年間をそこで暮らした。留学生達は儒教、仏教、道教、易学、暦学、天文学など、あらゆる知識を熱心に学んだ。

陰陽五行と古代の思想

飛鳥時代の稲渚の情景が広がっている。

「どうぞお寄りなさい」と自宅に誘う南淵請安。当時のことについて語ってくれる請安。

640年に帰国した請安は、飛鳥川に沿った稲渚の自宅で、若者達に大陸の進んだ思想を伝えた。天体の動きから未来を予測する「天文学」、自然界の成り立ちを説き明かす「陰陽五行説」、時を支配するための「暦学」などは古代においては立派な科学であり、当時の日本人が最も欲していたものだった。

602年に来日した百済僧の観勒は、

「私は暦法、天文学、遁甲、方術などを日本に伝えた。難しい学問を学生達は非常に熱心に学んだ」と語っている。

請安の生徒だった中大兄皇子と中臣鎌足は、やがて大化改新を成し遂げる。

請安とともに唐に学んだ僧旻と高向玄理は、国博士となって新政府に貢献した。

僧旻は「最先端の知識である易学を講義し、天文の異変などに知識を役立てた」、高向玄理は「大陸の情報を分析し、外交問題の折衝を行った」と語る。

さらに古代飛鳥に根づいていた科学知識を証明するものとして、キトラ古墳、高松塚古墳に案内する請安。その石室に描かれた四神図や天文図は、陰陽五行説などの古代中国思想に基づいて正確に描かれている。

漢字と万葉仮名

「渡来文化を受け入れて変容させた好例をお見せしましょう」

現代の飛鳥京跡が古代の都の姿になる。

その宮跡から木簡が現れ、木簡に書かれた文字が浮かび上がってくる。

国づくりが本格化すると、役所の機能を支えるものとして文字が不可欠となり、漢字の教養は役人にとって必須となった。そして、日本語の発音によく似た音の漢字を持ってきて表記する万葉仮名が発明され、日本人は、日本語による言葉を文字にする表現手段を手に入れた。

「この万葉仮名によって素晴らしいものが後世に遺されました。庶民から天皇までが仲良く歌を読んでいる万葉集です。世界に誇れる素晴らしいものです」と語る請安。

甘檜丘をはじめ、明日香に点在する歌碑を次々に紹介する。代表的な万葉歌人である柿本人麻呂は、「中国の漢詩や詩経も素晴らしいが、やまとことばのやさしい調べにのせて歌う歌も同様に素晴らしい」と誇らしげに語る。

さらに文字を使って歴史書が作られたことも紹介される。古事記の編纂者太安万侶は、「語り部の稗田阿礼のリズムをできるだけ表現したいと思い、万葉仮名と漢文の読み下し文を駆使して取り入れた」と苦勞を語る。

エピローグ

南淵請安が古代の飛鳥京を背景に登場し、語っている。

「いかがでしたか？ 飛鳥時代に我々が東アジアに学び、様々な思想、文化、技術を受容し変容させて、独自の文化を築いたことがわかりいただけましたかな？」

いまの明日香には、飛鳥時代の建物などは残っていませんが、今回東アジアの受容と変容の歴史を知ったみなさんの心の目には、渡来文化に彩られた古代飛鳥の姿がもう浮かんでいるのではないでしょうか。その心の目で見つめながら、繰り返し明日香を歩いてくださることを、この請安、心から祈っております。またぜひ稲渚にも足を伸ばしてみてください！」

古代の風景が、現在の明日香村の風景へと変わり、物語の幕が閉じられる。